

天草版平家物語と対称詞

—右馬の允と喜一検校の関係から—

市井外喜子

1592年イエズス会天草学林から出版された『天草版平家物語』は、原本名を「日本の言葉とイストリアを習い知らんと欲する人のために世話にやわらげたる平家の物語」とするものである。それは聞き手兼進行役をつとめる右馬の允(VM.)と、話し手の喜一検校(QI.)が「兩人相對して雑談をなすがごとく」にとの編纂目標にしたがって、「検校の坊、平家の由来が聞きたいほどに、あらあら略してを語りあれ」と右馬の允が請い、喜一が「やすいことござる：をうかた語りまらしょうず」と受けて、平家物語の大略を、当時の話し言葉によって語るものである。これがキリスト教布教のために来日した当時のイエズス会宣教師のための日本語学習のテキストである。

今回は、平家物語本文を観察するのではなく、右馬の允と喜一検校が「雑談をなすがごとく」語りあう両者の語り始めの部分に注目したい。古典平家物語本文に影響されにくく、当時の日常語から両者の関係が明白に確認できる箇所、即ち、対称詞が出現する部分のみをとりあげることにする。

とりあげる箇所を、記す。

①VM. なう喜一ついでにその清盛のことをも聞きたいよ。

QI. Conata さえくたびれさせられずわ、私わなんぼうなりとも語りまらしょう。(巻第一・第一平家の先祖の系図、また忠盛の上のほまれと、清盛の威勢栄華のこと：平家物語の語り始め部分、「鱸」相当部分を語りおえ、「禿髪」部分を語り始めるところ：高野本)

②VM. ちっとも Ionata にただ口わをかせまいぞ：なを先えを語りあれ。

QI. さてさていかい平家上戸でござる。義経わまたその山にをぢるうちに、(巻第四・第七 熊谷と、平山と一の谷え押し寄せ、軍して一二のかけを争うたこと：平家物語を約 $\frac{2}{3}$ 程度語りすすめ、巻第九第86句 熊谷・平山一二の駆相当部分を語り始めるところ：国会本)

③VM. さてさて長々しいことを退屈もなうを語りあったの。

QI. そのをことぢゃ、私が長いことを語りまらしたよりも、退屈もなう聞かせられたを奇特と存ずる。平家の由来わ大略この分でござるほどに、どこでもこ

の物語にをいてわ、conata もみごとあどをうたせられうほどに、重宝でござる。(巻第四・第二十八 六代高野え上らるる事と、平家断絶、また文覚も流され、ついにわ六代も首をはねられたこと：平家物語を語りおえた後の、右馬の允と喜一検校のやりとりである。この両者の言葉が天草版平家物語の語りおさめとなる。)

右馬の允から喜一検校への対称詞は、Sonata (②) であり、喜一検校から右馬の允への対称詞は Conata (①・③) である。このように両者間の対称詞例 (Sonata・Conata) は 3 例のみであるが、天草版平家本文中にみられる「Sonata・Conata」、また古典平家本文中 (高野本) に出現する「そなた・こなた」さらに『天草版伊曾保物語』、『懺悔録』などのキリシタン資料をも援用し、「Sonata・Conata」を吟味したい。

1 Sonata

右馬の允から喜一検校に対して「ちっとも Ionata にただ口わをかせまいぞ：なを先えを語りあれ。」と、Sonata が出現するが、他に天草版平家本文中には、8 例の Sonata がみられる。その用例を出現準に示す。

- 1 (成経→俊寛) まことにさこそ思し召すらう。われらが召し帰さるる嬉しさわさることなれども、Ionata の御風情を見をき奉れば、(巻第一・第十)
- 2 (仏→祇王) Ionata の出されさせられたを見たにつけても、いつかわが身の上であらうと思うたれば、嬉しゅうわなうて、(巻第二・第一)= 3・4・5・6
- 3 (祇王→仏) 祇王誠に Ionata のこれほどに思いあるとわ、夢にも知らいで、うき世の中のあさましさわわが身をこそ憂しと思をうことぢゃ
- 4 に：ともすれば、Ionata のことが恨めしゅうて、往生の素懐を遂げうずることかなわうとも覚えず、
- 5 今 Ionata の出家に比ぶれば、ことのかず
- 6 でもない。Ionata わ嘆きもなし、恨みもなし、
- 7 (義仲→頼朝) ただし蔵人殿こそ Ionata を恨むる事があると言うて、これにいられたをそれがしがかかえまらしたによってか？ (巻第三・第二)
- 8 いづちを西とわ知らねども、月の入るさの山の端を Ionata かと伏し拜うで、静かに念仏召さるれば、(巻第四・第十)

上記の Sonata を、古典平家 (高野本) 「そなた」と対照させ整理すると、次のようになる。

天草版平家 Sonata	古典平家（高野本） そなた	備考 （高野本）
1 成経 → 俊寛	×	卷第三 足摺
2 仏 → 祇王	わごぜ	卷第一 祇王(葉子十行本)
3 祇王 → 仏	わごぜ	〃
4 祇王 → 仏	わごぜ	〃
5 祇王 → 仏	わごぜ	〃
6 祇王 → 仏	わごぜ	〃
7 義仲 → 頼朝	御辺	卷第七 清水冠者
VM. → QI.	×	(卷第九 一二之懸)
8 ○	○	卷第九 小宰相身投

天草版平家に出現する9例のSonataは1例を除いて、他は対称詞である。これに対応する古典平家の「そなた」をみると、対称詞としての「そなた」は見られない。唯一Sonata=そなたとなる8番の用例は、ともに指示代名詞である。極楽浄土のある西の空をさす「Sonata=そなた」である。

1-1 高野本に出現する「そなた」

天草版平家に見られるSonata9例に対応する高野本の様相は、前述のようになる。次に古典平家高野本に出現する「そなた」の用例を示したい。4例の「そなた」が見られる。

- 1 備中の瀬尾と、備前の有木の別所の間は、はつかに五十町にたらぬ所なれば、丹波少将、そなたの風もさすがなつかしうや思はれけむ（卷第二 阿古屋之松）
- 2 まことや法輪は程ちかければ、月の光にさそはれて参りたまへる事もやと、そなたに向ひてぞあゆませける。（卷第六 小督）
- 3 人知れずそなたをしのぶこゝろをばかたぶく月にたぐへてぞやる（卷第九 三草勢揃）
- 4 いづちを西とは知らね共、月の入さの山のはを、そなたの空とや思はれけん、しづかに念仏したまへば、（卷第九 小宰相身投）

「高野本」に見られる上記4例の「そなた」は、前出の天草版平家で見られたSonataとは異なる。古典平家には人称代名詞としての「そなた」は、いまだ見られないと言えよう。しかし用例3の「そなた」は、「貴地=あなた（二位僧都全真）のいる方角」を意味し、対称詞的なニュアンスを感じさせるものがある。

対称詞の萌芽を見ることができよう。なお「高野本」4例の「そなた」と対応する天草版平家の Sonata は、前述用例 8 Sonata=そなたのみである。他の 3 例の「そなた」は、天草版平家では欠落している。

1-2 『天草版伊曾保物語』・『懺悔録』の Sonata

『天草版伊曾保物語』には、13例の Sonata が出現し、『懺悔録』には 1 例の Sonata が見られる。全用例を示す。

- 1 女房は返事にも及ばず噤すんで居たが、腹こそ立っつらう：いかにシャント お聞きあれ、Ionata と我は縁こそ尽きつらう、今よりしては夫とも頼みまらずまい、(イソボが生涯の物語略)
- 2 (シャント) 女中に言わるるは：いかに妻、ただし御身も、我も酔狂か？ 夢とも現とも覚えぬものかな！ さきの雑餉をば Ionata にこそ贈ったれ、(同上)
- 3 (下心) 人より恩を蒙っては、Ionata もそれを報じよう志をお持ちあれ：恩をも知らぬ者は蟻虫にも劣ると言う事ぢゃ。(鳩と、蟻の事)
- 4 (あるじ) ~躬が一七日の間洗い清めよう程のものを Ionata の一時召されよう事を以って、汚されようずれば、(炭焼と、洗濯人の事)
- 5 (或る人) 嘲って言うは：御辺の気遣いは無益ぢゃ。Sonata の賢い謀を以ってその悲しみをお宥めあれ。(貪欲な者の事)
- 6 さて Ionata の心には：黄金ぢゃと思ひおなしゃれ：(同上)
- 7 (狐) いかに勝れて気高い装いなるお方へ申さうずる事がある：Ionata のお声をばやがて承り知った (驢馬と、狐の事)
- 8 驢馬から馬に侘び事をして言うやうは：Ionata と、我は一門で、そっとの高下を以って隔たった：(馬と、驢馬との事)
- 9 少し Ionata の上に付けて我を助けられいかしと：(同上)
- 10 二人同じやうに歩いて行くところに、一人斧を見付けて拾い取るところで、ま一人の言うは：Ionata の一人のにはせまじい：(二人同道して行く事)
- 11 斧を拾うた者、なう同心した人、なぜに Ionata は力をお添えやらぬぞと言えば：(同上)
- 12 野牛狼に言うは：とても我只今 Ionata から食われようず：しからは多年好いた道であれば、最期に一奏で舞うて死なうず、(野牛と、狼の事)
- 13 或る蠅一つ獅子王の所に行つて、Ionata は躬よりも強うはない：それによつて某は貴所を物とも思わぬ：(蠅と、獅子王の事)
- 1 神父→信徒 Ionata も立て、人にもさせあつた空誓文で他人受けられた損、仇をば、つい直さいで叶はぬ：

上記用例に見られる Sonata は、すべて対称詞である。Sonata と称される範囲の広さが注目される。

1-3 Sonata の観察

Sonata についての吟味を、文典・辞書記述からみることにする。

ロドリゲス『日本大文典』（1604年～1608年刊、長崎）には、「Sono fō, Sonata, Conata は丁寧で、広く行われる」と記載されている。文典中には、Sonata の仰せらるる言葉、Sonata の御座る処は、等と、用例が数多く見られる。ところがロドリゲス『日本語小文典』（1620年刊、マカオ）には、「Sonata」についての積極的な記述が見られない。上巻には「基本代名詞、派生代名詞、所有代名詞についての二人称」に、Sonata は見られるが、注記がない。下巻「代名詞・使用頻度の高い代名詞」には、Sonata は見られない。『日本大文典』で見られた Sono fō の記述もない。Conata については、尊敬の代名詞として記載がある。またコリャード『日本文典』（1632年刊、ローマ）には、「同等の人又は幾分目下の人と語る場合には、Sònata, Sòno fò, Váre sáma の中の一つを用いる」とされている。

1604年（『日本大文典』）から1632年（『日本文典』）にかけて、日本国内外で出版されたこれらの文典に記載される Sonata を見ると、言葉の変化が著しい当時においては、対称詞の敬度が高下したり、新たな対称詞が加わったりすることは、当然のことと思われる。ロドリゲスの「丁寧で、広く行われる」の記述からは、一般的に使用される身分の高下にかかわらない敬意は、次第に失われていく方向にあることが示唆されている。なお『日葡辞書』（1603年～1604年刊、長崎）の Sonata には、「あなた、あるいは、貴殿」とある。

ちなみに「わごぜ Vagoje」をみると、「‘おまえ’の意で、話す相手をいくらか軽しめて言う。」とある。前述の「祇王」章段においては、清盛→祇王・仏への対称詞は Vagoje=わごぜ、母とち→祇王への対称詞も Vagoje=わごぜであり、辞書記述に適合するものである。古典平家の対称詞わごぜが、天草版平家では、Vagoje、Sonata に変化している。祇王と仏の関係は、「わごぜ」を脱して、Sonata の関係にあることを示している。この Sonata の関係を述部から見ると、祇王と仏の関係が明白になる。仏から祇王へは、「出されさせられた」「書きをかせられた」「召されさせられて」「歌わせられた」のように待遇度が高い。一方祇王から仏へは、「思いある」「をちゃったれ」「をいりあった」のように待遇上の違いがある。仏・祇王ともに相手に対して Sonata を対称詞として用いてはいるが、述部の違いが注目される。仏は、祇王を遇する気持ちを「～(さ)せらるる」と表現している。祇王が仏より年長者であること等も関与していよう。それに比

して祇王が仏を遇する「思いある」「をぢやる」「をいりある」は、待遇度が低い。両者のおかれた微妙なニュアンスの異なりが、述部に反映されていると言えよう。当時の一般的に敬意をこめた Sonata が、「丁寧」とは言え、程度の高い、絶対的な上位ではなく、「広く行われる」という状況を見せているものであろう。すなわち Sonata が絶対的な上位者に対する対称詞ではないために、述部に多様性が見られることになる。祇王と仏の置かれた環境差が Sonata と呼応する述部に両者間の微妙なニュアンスとして反映し、より深くその関係を把握することができる。

右馬の允が喜一検校に対する対称詞 Sonata-Vocatariare の呼応は、ロドリゲスが『日本大文典』で言う、「少し目下に当る者と話す場合に使う話し言葉では極めて広く行われる言い方である。例えば、Voyomiare、Voagueattaca?, Vonaraiarōca?」にあたる。

2 Conata

喜一検校が右馬の允に対して用いる対称詞は 2 例、ともに Conata である。

- 1。Conata さえくたびれさせられずわ、私わなんぼうなりとも語りまらしょう。
- 10。Conata もみごとあどをうたせられうほどに、重宝でござる。

Conata は、下位者が上位者に対する敬意ある対称詞であることは明白である。

さて天草版平家にはこの 2 例の Conata の外に、8 例の Conata が見られる。用例を出現準に示す。(全例 10)

- 2 鴛鴦、鴨のたぐい conata かなたえ遊ぎまわるにつけても、(巻第一・第十一)
- 3 (有王→俊寛の娘) なかなか conata のを文を御覽ぜられてこそ、いとど御思いわまさられてござる。(巻第一・第十二)
- 4 敵が平等院にあると見たれば、橋より conata から二万あまりの者どもが (巻第二・第五)
- 5 畠山の一族などわ conata え参らいでかなうまい (巻第二・第十)
- 6 そのうちに平家の大勢が山より conata え越さうぞ、(巻第三・第三)
- 7・8 さて何と conata え conata えと仰せられたれども、(巻第三・第九)
- 9 さうしてあなた conata と明かし暮さるるところに、(巻第三・第九)

上記の Conata を、古典平家(高野本)「こなた」と対照させ整理すると、次のようになる。

天草版平家 Conata	古典平家（高野本） こなた	備考 （高野本）
①QI.→VM. 2	×	（巻第一 鱸）
③有王→俊寛の娘 4	紫鴛白鷗逍遥す ×	巻第三 少将都帰 僧都死去
5	×	巻第四 橋合戦
6	×	巻第五 富士川
7	×	巻第七 願書
8	是へ	巻第八 山門御幸
9	是へ	〃
⑩QI.→VM.	×	緒環 （語り終了時）

天草版平家に出現する10例の Conata は、その多くは指示代名詞である。3例の対称詞 Conata は、QI.→VM.の対称詞の外は、有王から俊寛の娘に対するものである。高野本では「なかなか御文を御覧じてこそ、いとゞ御思ひはまさらせ給て候しか。」とあり、国会本では「なかなか、御文を御覧じてこそ、御思ひはいとどまさらせ給ひ候ひしか。」（巻第三・第26句有王島下り）とあり、対称詞 Conata に該当する語句が見られない。古典平家には、対称詞の「こなた」が出現していないと言える。

2-1 高野本に出現する「こなた」

天草版平家に見られる Conata 10例に対応する高野本の様相は、前述の通りである。次に古典平家高野本に出現する「こなた」の用例を示したい。5例の「こなた」が見られる。

- 1 おはしける局のあたりを、あなたこなたへ行通りたゝずみありきたまへども、（巻第六 小督）
- 2 吉についてあなたへ参り、こなたへ参らふ事も見ぐるしかるべし。（巻第七 篠原合戦）
- 3 和田がやうに、「こなたへ給はらん」とぞまねいたる。（巻第十一 遠矢）
- 4 本三位中将殿、こなたへたばじと候ば、義経参って給はるべし」とて、（巻第十一 腰越）
- 5 こなたかなたを観覧あれば、庭の千草露をもく、籬にたおれかゝりつゝ、（灌頂巻 大原御幸）

「高野本」に見られる上記5例の「こなた」は、前述の天草版平家で見られた Conata (対称詞) とは異なる。古典平家には人称代名詞としての「こなた」は、いまだ見られないと言えよう。

また『天草版伊曾保物語』には、1例の Conata が見られる。それは対称詞である。

- (イソポ→シャント) イソポ居直り (シャントに) 申すは：それは conata の御大切に思わせらるる者に渡いてござると答え、(イソポが生涯の物語略) イソポが主人シャントに用いた対称詞 Conata は、敬意を含むものである。

2-2 Conata の観察

Conata についての吟味を、文典・辞書記述からみることとする。

ロドリゲス『日本大文典』には、前述の Sonata と同じく、Conata も丁寧で、広く行われる、と記載されている。文典中には Conataua coreuo gozonji naica? の用例が続いている。一方ロドリゲス『日本語小文典』には、Conata は、kifō (貴方)、kifen (貴辺)、kixo (貴所)、kiden (貴殿) と同じグループをなし、「あなた」尊敬の代名詞とされている。『日本大文典』では、Conata は、Sonofō、Sonata と同じグループで、丁寧で、広く行われる。とされ、Quixo (貴所)、Quiden (貴殿)、Quifen (貴辺)、Quifō (貴方)、gofen (御辺) は、敬態で、書きことばか荘重な話しことばかに用い、また敬意を高くするには尊敬の助辞 Sama (様) を添えて、Quidensama (貴殿様)、Conatasama のようにいう、とある。したがって1604年~1608年刊『日本大文典』から、1620年『日本語小文典』の間に Conata の敬度に差がみられることになる。さてコリヤード『日本文典』では、Conata に関しては、次のように記している。「もし相手が目上の人であるか、又は遙かに身分のよい人であって、鄭重に話さなくてはならない時には、七つの語即ち、cōnatá, qixò, qifó, gōfen, qīden, cōnatá sama, sōnata sáma の一つを用いる。」したがって三文典間では Conata の敬度が最も高いのが、コリヤード『日本文典』である。なお、『日葡辞書』の Conata は、こちら、また、私、また、上 (Cami) では、尊敬すべき人と話す場合に、あなた (第二人称) を意味する とある。対称詞 Sonata と同じように Conata においても、言葉の変化が著しい当時においては、対称詞の敬度が高下したり、新たな対称詞が加わったりすることは、当然のことと思われる。

Conata と称される右馬の允の喜一検校からの待遇度は、「くたびれさせられずわ」「あどをうたせられうほどに」と、高い。ロドリゲス『日本大文典』には、「Saxerare, ruru. Xerare, ruru. Nasare, ruru : 話しことばにおいて最も高い程度の敬意を示す。」とある。

右馬の允が Conata-Saxerare と遇されるのに対して、喜一検校が Vatacuxi-Marasuru とあるのは、上下関係をはっきりと見せていることになる。

これまで見てきた対称詞 Sonata・Conata に関する文典（日本大文典・日本語小文典・日本文典）および日葡辞書の記述を表にまとめておく。また、天草版平家物語・天草版伊曾保物語・高野本平家物語における該当対称詞の有無も付しておくことにする。Sonata・Conata 関連の対称詞表として示す。

そなた・こなた関連対称詞表

対称 文典	方向の代名詞から			「わ」を もとに	漢語系					文典記述
	そのはう	そなた	こなた	われさま	貴所	貴殿	貴辺	貴方	御辺	
①	○	○	○							丁寧で、広く行われる
					○	○	○	○	○	敬態で、書き言葉か、 荘重な話し言葉かに用 いる
②			○		○	○	○	○		あなた。尊敬の代名詞
③	○	○		○						同等の人、又は幾分目 下の人と語る場合
		○さま	○さま		○	○		○	○	目上の人であるか、遙 かに身分のよい人で あって、鄭重に話さな くなくてはならない時
④	あなた また そちら	あなた 貴殿	時 上では尊敬すべき人と話す あなた（第二人称）		あなた あなたを尊敬して言う か	あなた 貴下 貴公など	貴殿	貴辺に同じ	貴所に同じ	
⑤	○	○	○				○		○	
⑥	○	○	○		○		○		○	
⑦						○			○	

- ①ロドリゲス 日本大文典 1604～1608年
 ②ロドリゲス 日本語小文典 1620年
 ③コリヤード 日本文典 1632年

④日葡辞書	1603～1604年
⑤天草版平家物語	1592年
⑥天草版伊曾保物語	1593年
⑦平家物語（高野本）	13世紀前

日葡辞書に登載されない「Vare sama」は、『仙台言葉以呂波寄』猪苗代兼郁 1720年に「あなた」対称詞として記載されている。また「わりさま」としては、『はまおき＝久留米』野崎教景1840～52に見られる。「わりさん」・「わるさん」（低級な語）として、『肥後方言と普通語言葉改良の栞』私立玉名郡教育会 1907『鹿本郡誌鹿本』鹿本郡役所 1923、『笑訳熊本方言字典』福田秀蔵 1938に見ることができる。

文典の編纂に際して、ロドリゲスあるいはコリャードがどのような方針で、当時の言語事情を反映させる努力を行なったかを、見ておきたい。

ロドリゲス『日本大文典』緒言、コリャード『日本文典』読者に寄する序等を引用しておく。

- （長老達）文典では、活用や品詞論の外に、正確にして且つ上品に話す事を考える規則と法式とを出来るだけ平易に説明せよとの事であった。
- この国語は、新しい事柄が常に次々と現われて来るほど、多量且豊富である事を十分に経験しているが、本書に収めたものについては、私のなし得る限りあらゆる吟味を加え注意を払って、少くとも誤謬のないようにと努力した。（ロドリゲス）
- 日本王国に我が正教の信仰が扶植された最初の頃、ゼズス会の神父ジョアン・ロドリゲス師によって、既にある種の日本文典が編述せられてはいるが、～この文典から必要なもの（それは事実多い）を取り出して、識者が見て是認されないようなものは取り捨て、さらに実地の見聞と不断の読書によって私が会得したものをつけ加え、神父達に、日本語を使用する上に必要な総ての法則を簡明に要約したならば、人々の帰依を確める準備となるであろうと、私および信仰伝道の神父達には思えたのである。（コリャード）

両者ともに布教のために、正確で典雅な日本語を学ぶための文典編纂を心がけた様子が読みとれる。対称詞 Sonata・Conata の記述からも、その一端を知ることができる。中古頃までは対称詞の数が比較的少なかったが、中世に入ると数も多くなり、ニュアンスの多彩さが注目されるようになった。『天草版平家物語』の「Sonata」・「Conata」もその一翼を担うものである。

3 コナタ・ソナタの方言

『日葡辞書』Conataに、上(Cami)では、尊敬すべき人と話す時、あなた(第二人称)とある。日葡辞書ではCamiと使用地域が限定されているが、現代の方言辞典の「コナタ」分布領域を見たい。1989年刊『日本方言大辞典』徳川宗賢監修(小学館)による全国分布模様を示す。

日本方言大辞典 コナタ(あなた)	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京
コナタ				㊦		○	㊦						
コナツ													
コータ													
コノダ													
コンタ		○	○		○					○			
コンタン													
コダ					○								
カンタ													
コナタ類		○	○	○	○	○	○			○			

神奈川	新潟	山梨	長野	静岡	愛知	岐阜	富山	石川	福井	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取
	㊦							○	㊦		○						
			○														
	○				○				㊦	○	○	○		○		○	○
																	○
	○		○		○			○	○	○	○	○		○		○	○

島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
				○						○	○		○		
											○				
○	○	○	○		○	○	○	○			○	Ⓣ	Ⓝ		
										Ⓣ					
Ⓣ															
○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		

コナタ類は47都道府県中、31県に出現し、関東・東海には分布は薄い、東北・近畿・中国・四国さらに九州へと領域が広がっている。またコナタ類の注記にも特色がみられる。

- ①目下に対して：宮城県登米郡・福島県会津若松市・大沼郡 やや目下に対して：大分県＝大分県方言の研究 三ヶ尻浩
- ②目上に対して：新潟県佐渡・福井県若狭・長崎県南高来郡 老人に対する敬称：福井県大飯郡＝福井県大飯郡方言の研究 松崎強造
- ③夫が妻に対して、夫が妻女に呼びかける語として：山口県豊浦郡＝長門方言集 重本多喜津、山口県＝防長方言考 新井無二郎

また、若い者同士で、親が子に対してなど、広がりが見られる。

1996年刊『日本語方言辞典—昭和・平成の生活語—』（藤原与一、東京堂出版）に見られる「コナタ」を示す。

熊本県阿蘇山南麓 ソリャ、コナタガ マチガイ ナカ。 初老男→藤原ら
 名古屋市 コナタノ トコノ メイブツ。 中女→藤原
 滋賀県湖西北 コナタモ キヤハッタカ。 中女

コナタは、女が使う。コナタノ—目上の人に言う。（ばあさんがじいさんにも言う）

さらに『福井県方言集』敦賀郡コナタ、ドコイクンゼノー。

石川県下にもコナタ（あなた）があり、新潟県北にはコナダがある。福島県西北辺コナター、アノー コレ シテ クンツェー。老女。中国地方のうちにも、対称のコナタがある。

続いて現代の方言辞典＝『日本方言大辞典』による「ソナタ」の全国分布の模

様を示す。

日本方言大辞典 ソナタ (あなた)	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京
ソナタ					○	○				○			
ホナタ					○								
ヒナタ													
スナタ													
ソント													
ソング		○	○					○				○	
ソダ		○			○								
スタ										○			
スター										○			
ソナ													
ソナタ類		○	○		○	○		○		○		○	

神奈川	新潟	山梨	長野	静岡	愛知	岐阜	富山	石川	福井	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取
	○										○						
										○							
					○	○											
				○						○							
				○													
	○			○	○	○				○	○						

島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
										○					
															○
○		○													
○		○								○					○

ソナタ類は47都道府県中、17県に出現し、コナタ類の西日本領域における分布領域の密度に比べ、希薄さが注目される。

1993年刊『現代日本語方言大辞典』（編集委員平山輝男、大島一郎他 明治書院）に見られる青森・八戸・会津のソナタを示しておく。

- 青森 ソナダ 普通、妻が夫あるいは他家の主人に対して使う。男性を尊敬していたので、このような敬意の高い言葉を使ったと言う。ソナタとも。
- 八戸 ソナタ 旧士族の男女が同等ないし目上に用いる。劣勢。
ソナダ 旧士族以外の男女が同等・目上に用いる。劣勢。
- 会津 スナタ 同等・目下に対して。但し、男性が男性に対してのみ。

以上、現代方言に生きる「コナタ」「ソナタ」の様子を、『日本方言大辞典』・『日本語方言辞典—昭和・平成の生活語』・『現代日本語方言大辞典』から見てきた。1592年『天草版平家物語』において、右馬の允と喜一検校の両者間に用いられた対称詞 Conata・Sonata は、現在の日常生活におけるコナタ・ソナタへと生き続けていることになる。

参考図書

天草版平家物語対照本文及び総索引 江口正弘 明治書院
 平家物語 新日本古典文学大系 岩波書店
 平家物語 新潮日本古典集成 新潮社

天草版伊曾保物語 井上章編 風間書房
コリヤード懺悔録 大塚光信翻字 風間書房
邦訳日葡辞書 土井忠生・森田武・長南実編訳 岩波書店
ロドリゲス日本大文典 土井忠生訳注 三省堂
ロドリゲス日本語小文典 上・下 池山岑夫訳 岩波文庫
コリヤード日本文典 大塚高信訳 風間書房
日本方言大辞典 徳川宗賢監修 小学館
現代日本語方言大辞典 平山輝男編集代表 明治書院
日本語方言辞典—昭和・平成の生活語— 藤原与一 東京堂出版